

平成24年度 海外学生受入研修報告

「海外学生受入研修」は、タイ国カセサート大学 (KU) およびカンボジア王立農業大学 (RUA) との大学間学術交流協定に基づき、「海外実地研修」と対になった双方向交換プログラムの一環として位置づけられています。平成24年度は、平成25年3月16日(土)～3月25日(月) (11日間) に両大学から学部3年生 (KUの農学関連5学部から20名、RUAから4名) を受け入れ、名古屋大学農学部3年生 (21名) とともに研修を実施しました。今回の受入研修では、3カ国の学生を4テーマ (コメ生産、畜産、先端農業、灌漑・水管理) 8グループに分け、愛知県下でそれぞれ2泊3日の現地研修を行い、それらの成果を英語で発表して単位認定がなされました。小編成 (1グループ5名) で学生が主体的に学習したプログラムは好評であり、現地での興味対象やその捉え方も3カ国の実情を反映し、成果をまとめる段階でより深い議論ができました。本研修では、参加学生が日本の農業や農協組織、農学の先端基礎研究についての理解を深めるとともに、3カ国の学生間の交流を通して互いに国際感覚を磨くという成果が得られました。本研修において、その企画・準備、事前・事後研修ならびに研修の実施には、農国センターの教員と職員が重要な役割を果たしています。

(川北一人)



コメ生産現地研修に参加したKU, RUAならびに名大の学生と教職員

国際的に活躍する若い人材をそだてよう

平成24年度農林水産省委託事業で、取り組みの方向性の提言をまとめる

世界には、先進国や途上国に関わらず、健康で安全な食料やその生産環境に関わる多くの課題があります。そんな中で、課題解決に向け、我が国が培ってきた研究手法や研究成果を世界の農業現場や食品加工現場などで活用し、国際社会でイニシアティブを発揮するには、これらを担う農林水産研究分野の人材育成が欠かせません。当センターでは一年に亘り農林水産省委託事業により若手農学研究者の育成方策について調査をしてきました。そのような人材の育成には、早い段階から国際的な感覚や発想を育て、世界の農業現場で実学を研究させることが有効です。研究者の活躍の場は研究現場だけではありません。国際協力や民間企業あるいは国際機関や国際会議等でプレゼンスを示すことも期待されています。若手人材育成に向けた提言は「農林水産研究分野で国際的に活躍できる日本人材の育成に向けた我が国の取り組みの方向性」としてまとめられています。(浅沼修一)

JSPS「二国間交流事業(ケニアとの共同研究)」(2013～2014年度) ケニアにおけるいもち病菌レースとイネ品種の多様性解析による防除技術の開発

ケニアの主要な稲作地帯では、いもち病が多発し、コメ生産が半減するなど大きな問題となっています。いもち病が問題となっている地域では、共通して単一イネ品種の連続栽培が行われています。単一品種の大規模連続栽培が行われると、その品種を侵害できるいもち病菌レースが出現・増殖し、いもち病抵抗性の崩壊が起こると考えられています。本研究では、ケニアにおいて、いもち病菌菌系の病原性やイネ品種の抵抗性遺伝子型を同定することのできる判別システムを構築し、いもち病防除技術の開発を進めるため、ケニア各地の栽培イネ品種と栽培体系の把握、ケニアのイネ品種のいもち病抵抗性遺伝子型の同定、いもち病菌レースの多様性の解明、いもち病抵抗性QTLを導入した系統の耐病性の検証に取り組んでいます。なお、本研究は、ICCAE、国際農林水産業研究センター(JIRCAS)、農業生物資源研究所およびケニアの国家灌漑公社による国際共同研究として実施しています。(横原大悟)



いもち病によるずり込み病状
(ケニア・ウエストカノ灌漑地区)